

はね 羽根遺跡

所在地 豊川市萩町
(北緯34度52分10秒 東経137度19分39秒)

調査理由 道路改良工事(臨交)大代音羽線

調査期間 平成20年4月～平成20年9月

調査面積 4,100㎡

担当者 鈴木正貴・川添和暁・成瀬友弘



調査地点(1/2.5万「御油」)

調査の経過 発掘調査は、愛知県建設部道路建設課による県道大代音羽線改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成20年4月から平成20年9月にかけて実施した。調査面積は4,100㎡であり、全体をA・B・C・D・Eの5調査区に分けて調査を行った。

立地と環境 羽根遺跡は、豊川市萩町羽根に所在し、山陰川に向かって傾斜をする丘陵北側斜面の裾部に北東から南西に約200mの範囲で広がっている遺跡で、標高は70～80mを測る。当遺跡周辺には、南に旧東海道の近世赤坂宿が所在し、丘陵尾根を挟んだ南側斜面末端には後期旧石器時代の良い資料を出した駒場遺跡や、古代の三河国分寺跡・国分尼寺跡が所在している。

調査の概要 調査は北東からA区～E区の5区に分けて調査し、17世紀頃の近世の屋敷地を中心とする遺構が確認され、近世前半のこの地域の集落立地を考える上で良好な資料が得られた。

古代以前 古代以前の明確な遺構は確認されていない。ただし、A区からは縄文時代かそれ以前と考えられる黒曜石やチャート・熔結凝灰岩製の剥片石器類などが出土しており、C区からは古代の須恵器が出土している。これらは若干数しか出土しておらず、特に剥片石器類については斜面上部から流れ込んできた可能性が高いとおもわれる。その他A区・B区では弥生時代後期に該当する土器が出土しており、調査区周辺にこの時期に該当する集落が展開していた可能性が考えられる。

中世から戦国期 A・B区では、地形の傾斜に沿った形で平場を形成し、崖面下には排水用と考えられる溝241SD・242SD・325SDなどが配されており、これにより平場が区画されている。平場には多数の柱穴があることから掘立柱建物が展開する屋敷地であったと考えられる。C区でも同様に地形に沿った土地利用が行われていたと考えられ平場10に769SDが配されている。その他の遺構は南西最上部の平場8を中心に展開する。C区では柱穴のみならず、墓壇と考えられる大型の土壇も若干ではあるが確認されており土地利用についてA区との差異がある。遺物は山茶碗などの出土が確認されているが、それほど多く出土はしていない。

近世前半 A区ではこれまで存在していた平場の上に、調査区を貫く形で土盛りと側溝031SD・060SDによって道406SFが形成される。平場の区画はそれ以前の区画の形を踏襲しつつも平場先端部に土盛りをすることによって平場の面積を広げており、その上に柱穴が多数確認され掘立柱建物による屋敷が展開していたものと考えられる。またA・B区の平場を区画する溝は崖面下などを中心に石積みをして作られている048SD・051SD・052SDなどがあり、暗渠状を呈している070SDなども存在する。C区ではA・B区と同様に平場8で盛り土による平坦面の拡充が行われ、崖面には石垣501SWが確認された。この崖面の盛り土中や501SWには石塔類が含まれており、又崖部の壁面を整形後に多くの一石五輪塔などの石塔類が廃棄された502SUが確認されている。こうしたことからこの付近にあった墓域

を改変して建物などを建てた可能性が考えられる。遺物はA・B区では天目茶碗や播鉢などの陶器類の出土が目立っている一方で、C区では陶器類の出土はあまりなく土師鍋・土師皿などの土師器が中心である。こうした出土遺物の差などから考えると近世前半においてもA・B区とC区には土地利用の違いが残ると思われる。石塔類については、片麻岩製のものが中心で一部に花崗岩製のものが混じる。また、一石五輪塔の多くは火輪から下部のみが出土しており、上部の出土数が少ないことから廃棄段階に故意に破壊した可能性も考えられる。

近 世 後 半 近世後半の状況は、近世前半期の区画などをそのまま利用しているもののB区には数基の井戸が作られ、B・C区には常滑産の甕が埋められその周辺に溝が配される状況が確認される。またC区の平場8では501SWなどを盛り土によって埋め、平場を1m以上拡張し崖面の下には746SDが作られる。平場には調査前に残っていた旧宗桂寺の基壇が作られたと考えられる。またD区にも溝1648SDが作られ、新たな区画が作られたことが確認されている。遺物としては、土師皿などが崖部で出土し、又旧宗桂寺の基壇からは寛永通宝を中心に銭貨が十枚程度確認されている。

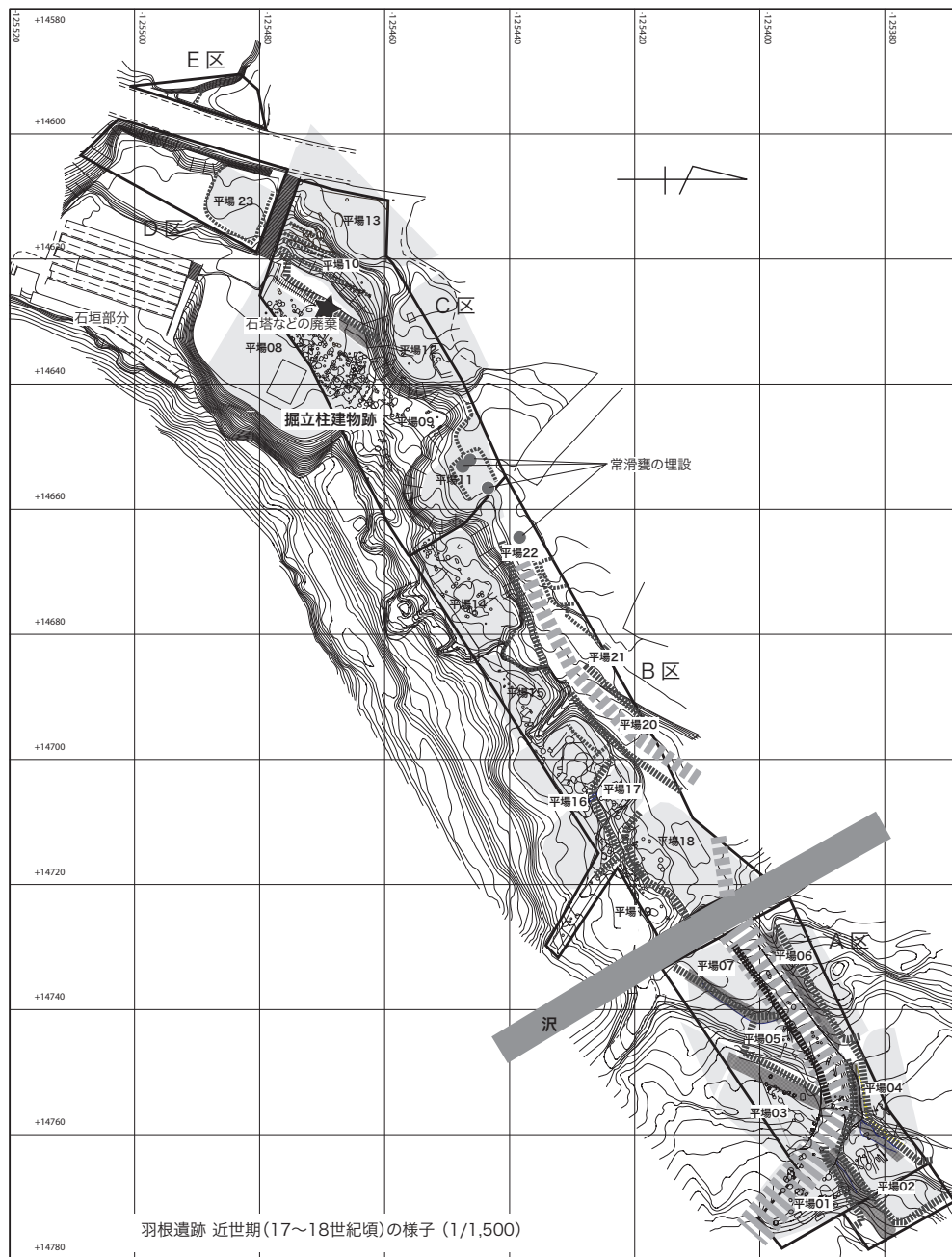
ま と め 今回の調査の結果、羽根遺跡は中世から近世を中心とする遺跡であることが判明した。中でも近世前半以降に土地の利用が活発化していること遺構などの状況から判明した。またA・B区では屋敷地としての区画が想定され、C区で墓域から寺へと土地の利用が変化していったことが考えられることから集落の変遷なども考えることができる資料となった。また今回の調査ではそれぞれの段階の整地された崖面に土師皿・土師鍋・陶器などが廃棄されておりこれらの時期を考える上でも貴重な資料を得られた。(成瀬友弘)



調査区遠景(南西から)



調査区遠景（北西から）





A区031SD・406SF



A区051SD



A区070SD



B区1256SD 遺物出土状態



C区501SW



C区石塔群出土状況



D区平場



出土銭貨